琉球大学学術リポジトリ

ルイ・テオドール・フューレの手紙：フランス人宣教師のみた1850年代の琉球

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学国際沖縄研究所
	公開日: 2014-12-25
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 宮里, 厚子, Miyazato, Atsuko
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/30138

『国際琉球沖縄論集』第3号
2014年3月

【翻訳】

ルイ・テオドール・フューレの手紙
ーフランス人宣教師のみた1850年代の琉球ー

宮里　厚子*

Louis Théodore Furet's Letters
-Ryukyu in 1850s viewed by a French Missionary-

MIYAZATO Atsuko*

はじめに

ルイ・テオドール・フューレは1855年2月26日～5月8日、および1856年10月26日～1862年10月12日まで琉球に滞在したフランス人宣教師である。この時期に来た他の宣教師同様、パリ外国宣教会から派遣され、開国が迫る日本本土への上陸の機会をうかがいながら琉球に滞在した。フューレは同じく琉球に滞在したフランス人宣教師で、日仏条約締結の際通訳を務めたジラールや、長崎で隠れキリシタンを「発見」したプティジャンなどに比べると知名度は低いが、琉球に最も長く滞在した後、プティジャンとともに長崎で大浦天主堂の設計と建築に関わり、横浜では造船所に勤めるフランス人技師たちのための礼拝所で司祭を務めるなど、開国前後の日本のカトリック教史にとっては無視できない人物であると言える。

ここで紹介する文書は、フューレがパリにいる民族学者・言語学者である知人のレオン・ド・ロニーに宛てた手紙の一部であり[1)]、琉球の気候風土、人々の生活などをおもに述べているものを抜粋した。1844年から1862年までの期間に8人のフランス人宣教師が琉球に滞在しているが、彼らが琉球についての報告書や見聞録を書くとき、各々に異なる視点でその滞在を描いている。フューレの特異な点は、宣教師であるとともに、科学に造詣が深いことである。数

*琉球大学法文学部国際言語文化学科　准教授　Associate Professoer, Faculty of Law and Letters, University of the Ryukyus. 本翻訳は、JSPS科研費24320056の助成を受けた研究の成果の一部である。

学の分野で学位を取り、物理や化学の家庭教師をする一方、植物や鉱物、解剖学や医学にも興味を持っていたと言われる[2)]。以下に紹介する手紙でも、約 2 か月間の第 1 回目の滞在で知り得た琉球の動植物について詳細に書き、また貝の化石を拾ったことなどにも触れている。

＜手紙 1 ＞
琉球本島
［日本海］
1855 年 10 月 12 日、香港

琉球島はこれと同じ名を持つ王国の最も重要な部分で、1．琉球諸島、2．奄美諸島、3．宮古島諸島で構成されています。一番大きな島には王国の首都で王の居住地である首里があります。首里は丘の上にあり、那覇港から 4 キロメートルのところにあります。我々の言語の先生である役人達が嘘を言っていなければ、この島には大きくて人が多く住む町が 12 あります。役人達から得た知識によれば、これは大げさな数字ではないと保証することができます。首里や那覇の人口をはっきり言えるほどこの国を知っているわけではありませんが、通りを埋める子供たちの多さから判断するに、ここの人口はかなり多いと言えます。島の人口は 20 万から 25 万人はいるはずです。私にはこれ以上詳しく言うことはできません。なぜなら地元の住民や特に役人達は、我々がこの国について質問すると、制限に制限を重ね、嘘に嘘を重ねるからです。琉球から 6、7 里のところに位置する小さい奄美諸島は、多くの人が住み、よく開墾されています。

琉球王国は独立国家でしょうか？いや、それは違います。どこに従属しているのでしょうか？琉球の人々は中国にのみ従属していると主張します。それでも、特に日本に支配されていることはやはり明らかです。中国が公然とその従属を*誇り*としているのに対し、日本は秘かな*収穫物*としているようです。日本や日本との関係について質問された役人達が明らかに困惑することも、我々にとってはその従属を十分に証明するものです。その上、我々が本島に到着したとき（1855 年 3 月 2 日）、我々は港の砦の近くで 2 隻の日本の船を見ました。3，4 日後にはこれらの船は消えていました。おそらく那覇に 3 人のフランス人宣教師が上陸したと日本に伝えに行くためでしょう。

政府の*排斥政策*の困難にもかかわらず我々を那覇に連れてきた知的な船長は、フランスの海軍大将が日本に行く途中で彼らに会いに来るかもしれないと告げることで、役人達の心に好奇心を芽生えさせ、不安を植え付けてありました。その海軍大将はいつ日本に行くのか？何隻の艦船で？どの港に？どのような目的で？と矢継ぎ早に彼らが尋ねるのはもちろん、日本が彼らとは無関係ではな

いという証拠です。それに、我々が天久の寺に落ち着いてから 2 日間、日本に関して我々が与えた返答を複数の役人が我々に何回も繰り返し言わせ、丁寧に書き取っていました。日本の船はこの情報を得た後に出発したのです。

首里には王がいますが、彼は未成年です。国王陛下と摂政は何人かの日本の役人の影響下にありますが、外国人の目にはそれとはわからないようにしています。大臣であり通訳であるイタラシ[3]はこれらの日本人の一人と言って間違いないと思います。外国人が到着すると、この大臣は一人でこれを取り仕切ります。日本の政策をすべてにおいて、そして常に、主張するのは彼なのです。通訳にしか見えないにもかかわらず、おそらく摂政自身になすべきことを言っているのも彼なのです。彼が話すときは役人の誰一人として声を出そうとはしません。私は彼のなかに長崎で見た日本の役人達の特徴とすべての態度を認識できます。

私が香港で出会った日本人を信じるなら、琉球王国は薩摩の王子の領地で、日本に最も美しい綿織物を供給しているということです。

王国の法律を知りたいという思いから、我々はある日我々の先生達に彼らの法典を手に入れることは可能かどうか尋ねてみました。ほどなく否定的な答えが返ってきましたが、しかし我々はあなた方の法に従い、知らずに悪いことをするのを避けるためにも、これを知っておくことは必要だと言いました。いいえ、必要ではありません、必要ではありません、外国人は我々の法律を知る必要はありません、と彼らのうちの一人が言いました。したがって、私は琉球の法律を何も知りません。ただ、警察が極端な警戒と厳格さをもってこれを適用し、貧しい人々が、たばこを吸いお茶を飲んで過ごしている多くの役人達の奴隷になっているということだけは知っています。彼らが働くとすれば、それは公用語であるらしい中国語を勉強するためです。王府は、外国人がこの国に関することについては何も知ることがないように、そして役人達が日本語を話すことも書くこともできないふりをするように非常にこだわっています。我々は 15，6 歳の生徒にカタカナで彼の名前と我々の名前を書かせ、その後我々の先生達に彼らが嘘つきだと証明するためにその生徒の虚栄心を利用せざるを得ませんでした。もちろん、その物知りの生徒を巻き添えにするようなことはありませんでしたが。

琉球の言語は日本語の一方言であり、語尾と発音の違いで特徴づけられます。少なくとも話し言葉では、動詞はユン（ンは鼻音）、イユン、チョンで終わります。例えば、ツクユン「作る」、ヌシユン「乗せる」、イクチョン「知らせる、警告する」。未来形も独特の形をしています；例えば；ツクルディ　チョン「作るでしょう」、イクディ　チュン「行くでしょう」、アミフユン「雨が

降る」。私は我々の先生達が 1 人称の代名詞として*ワーガ*、2 人称の代名詞として*ヤーガ*と*ヤーヤ*を使うのをいつも耳にしていました。

琉球の人々が同国民同士の関係で嘘をつく習慣があるかどうか私は知りませんが、王府は国民に対して、「外国人達をだましなさい、だますためには嘘をつきなさい、どんどんつきなさい」と言っているかのようです（そして私はそれを信じたい気になっています）。それなので、私が那覇の市場に 2 度ほど予告なしに到着し、自分の目で見渡してみても、お金を一枚も見なかったということを、あなたは信じるでしょうか？泊の大きな村と那覇の街を分けている塩田で中国のサペックに似た硬貨を一枚見つけていなければ、私はここの人々がお金を使うということを全く知らずにいたでしょう。

ある役人は、琉球にはお金がない、サペックさえない、と私に押し通しました。

「おまえは嘘つきだ、なぜなら私が塩田で見つけたものがここにあるのだから」と私は言いました。

「ああ、そうなのですか…？あるにはあるのですが…、*ほんの少しです！*」と彼は答えました。

私は彼らが硬貨を持っているかどうか知りません。日本人は三角形の硬貨を持っていて、私は約半ピアストルの重さのものを見たことがあります。

私が役人を嘘つき呼ばわりしたとき、彼が決闘を申し込まなかったことにあなたはおそらく驚いたかもしれません。ご心配なさらずに：このような一言に耐える勇気がなく、このような場面で殺したり殺されたりする名誉を見出すほど狂ったヨーロッパ人達と違い、琉球の人々はこのような関係ではより分別があり、自分たちが嘘つきに値すると認めるのと同じぐらい簡単に嘘つきの汚名を受け入れるのです。それで我々は、役人達が嘘つきだと証明したことが幾度かありました。すると彼らは、怒ったりふくれ面をしたりをする代わりに、笑いながら顔を見合せ「このフランス人達は見抜くのが上手い、全部ばれてしまう！」と言うのでした。

真面目で温厚な琉球人達の性格には本当に目を見張るものがあります。横柄な口ぶりでもめてもいいような困難な事柄を扱うとき、彼らはその発言においても、口調や態度においても礼儀の限界を超えることは決してありません。2 か月半の間、誰かが怒ったり怒鳴ったりしているのを見たことも聞いたこともありません。それに、善良で尊敬すべき住民達、特に数多くいる年寄り達は、人の人相をしばしば変えてしまう怒りの感情が彼らの大部分にとって無縁だということを十分私に教えてくれます。善良さや思いやりと言ったものが、いうなれば、彼らの性質の根底をなしているのでしょうか。外国人がいくつかの小さな意地悪に不満があるとすれば、そしてまだ島民達、特に女性たちが外国人

の前から逃げるとすれば、それは政府だけが悪いのです。

ここの民衆の服装は、日本人のものとあまり変わりません。琉球人たちは日本人のように髪の一部を剃り、他の部分を前に持ってきて、それぞれの社会的身分によって金や銀、あるいは価値の劣る合金でできた星形の大きくて強いカンザシで留めています。日本人が頭頂から前をおでこまで剃るのに対して、琉球人は聖職者の剃髪のように頭の上の部分を剃ります。フランスの婦人たちが琉球に行くのなら、そこの男たちが彼女たちに負けないくらい髪に気を遣っているのを見て屈辱を感じるかもしれません。それに対して、女性たち（少なくとも一般庶民の女性たち）は髪をすべて伸ばし、彼女たちのごく普通の顔立ちを美しくするよう引き立たせることができないほど手入れをせず無造作にしています。このあまりにも手入れをしていない髪に、たいていは汚れていて前が開き、ふくらはぎまで下りている木綿のガウンのような服を足してみてください。間違いなくあなたは琉球の女性たちは見るに堪えないと言うことでしょう。ズボンやシャツ、靴下は高級品で、役人達でさえ特別な機会にしか使用しません。男性は普段は女性と同じような服しか持っていないのですが、その服はより長くて帯で前を閉めているので、女性たちのように前で交叉させるため、あるいは裸をおおう汚い下着を道行く人の視線から避けるために服に常に手をかけている必要はありません。

履物も衣服より素晴らしいわけではありません。これらは藁のみ、または藁と様々な厚さの木の底敷でできたサンダルのようなものです。これらの草履は同じく藁でできた紐が足の上を通り、足の親指と人差し指の間に入るように木釘で底に固定され、上からは紐で固定されています。

日本では、多くの男性や若者が刀や短刀を持っているのを見かけますが、琉球では例外なくすべての者が武器を持たずに歩いています。役人達の言うことを信じるなら、この島に武器はないのです。私も一度も見たことがありません。しかしながら、那覇の小さな川の入口の砦は武器を受け取るために準備されているように見えます。防衛のために武力に頼ることができないこの弱い国民は、事実か建前のものかはわかりませんが、その弱さと貧しさが外国人に対しての武器になると信じたのです。

島は、高い山が見える北部を除いては、大きな山はありませんが起伏に富んでいます。首里や那覇の人々が*未開人*と呼ぶ、より文明化されていない住民たちがいるのはその北部のようです。

気温は健康には適しているに違いありません。4 月 1 日から 5 月 5 日まで、最低温度計は 14 度以下には下がらず、通常の温度計は 28.4 度を上回っていません。さらに、3 月の初めに芋を収穫するのですから、寒さは冬の間も緩やか

に違いありません。

私の知っている田舎のイメージをあなたに説明するには、「美しいイギリス式庭園」と言うことしかできません。この庭園の小道は確かに均一ではなく砂をまかれてもいません。反対に、しばしば荒れていて小石だらけです。しかしこれらの場所の美しさや多様さがその不都合をすぐに忘れさせてくれます。多くの丘は松やモミで飾られ、その木々の下には小さく肥沃な野原があります。これらの丘の斜面には厳かな墓が数多くあります。平野は労働者で覆い尽くされ、よく耕されているので、琉球の人々はヨーロッパ人から農業の手ほどきを受けなくてもよさそうです。あちらこちらに点在する広大な木立は、竹林や遠くまで心地よい香りを漂わせる花をつけた灌木のなかに、多くの家々や、大きな村々の素晴らしく清潔な小道を歩く人々を隠しています。これらすべてが、琉球の田舎を王の庭といった風情にしています。

那覇の町と泊の村もまた独特の美しさを持っています。そこに建てられた壁は、住民の器用さと忍耐強さを証明しています。想像しうる最も不揃いの大きな石を集め、それから石工に、これらの石で漆喰を使わずに、頑丈でしかも軽石で磨かれたかのように均一な壁を作るように言ってみてください。琉球の人々はこれを完璧にやってのけたのです。これらの壁や、それを取り囲むスイカズラが絡みよく手入れされたクマシデの並木道は、王府が公共の道路や個人の庭の美化に大きな影響を与えていることを示していると言えます。これらの壁の向こう側の家々の内部はというと、外側[の美しさ]に相当するものではありません。

琉球の植物がどのような感じかというと、桃の木、ザクロの木、パパイヤ、（特に布のために栽培している）バナナの木、桑の木、ツゲ、ニワトコ、様々な種類のバラの木、非常に高い（約 5 メートルの）椿、観賞用のスグリの木、木になる赤や黄色のアオイ、竹、アレカ椰子[4]やタコノキ[5]などいくつかの椰子の木、などを挙げれば想像がつくでしょう。オレンジの木も非常に多く、田舎にさえ見られます。驚異的な大きさのオレンジの実をつける種類もあります。周りの長さを測ると 0.325 メートルはくだらないものもありました。人が持ってきたオレンジでこれと同じような大きさのものが他にも 3 つありました。

もっとも珍しい木の中に、香港で我々が*パゴダの木*と呼ぶものがあります。常緑樹であるこの木々のなかには、その大きさと幹の驚くような形、地表を遠くまで這う数えきれないほどの根っこ、そしてしばしばボリュームのある束を作って空中にぶら下がっている乾いた根っこなどで目を引くものがあります。この力強い木々のそばには、たいていかなり茂った夾竹桃があり、高さ 12 から 15 メートルにも達します。しかし、少々目立つ花をつける木々の中でいちばん目を引くのは、文句なしにマメ亜科に属する種類です。インゲン豆の葉に

似た葉がすべて落ちたときは、この木は枝の付き具合から大きなクルミの木のように見え、肌色をしています。小さなトゲがあり、幹はとてもはがれやすいです。美しい赤のその花は、トチの木の花より大きく、まだ葉のついていない枝の先端に5つから6つ、または8つの房で冠状に並びます。

草木植物には、白ゆり、ホウセンカ、カーネーション、菊、マンネングサ、スミレ、青いハコベ[6]、オオバコ、カタバミ、タデ科の植物、アマドコロ、トウダイグサ、トウガラシ、ヒルガオ、そしていくらかの美しいシソやランなどがあります。

穀物に関して言えば、4月に2種類の麦（ヒゲのあるものとないもの）を刈り入れているのを見ました。雑穀類は芽を出したばかりでした。田んぼとサトウキビ畑もきれいでした。芋（私は3つの種類を認識できました）と葉タバコは島では重要です。野菜は美しく、多様です。キャベツ、大根、ニンジン、フダンソウ、ホウレンソウ、レタス、ソラマメ、インゲンマメ、エンドウマメ、キンセンカ（サラダとして食べる）、ネギ、小さい玉ねぎ、ゴボウ（Lappa や Bardane の一種で根を食べる）、竹などです。それから、飢饉のときに重要な役割を持つ植物について触れないわけにはいきません。飢饉のときにのみ、人々が食すのです。あいにくその植物の名前を思い出すことができないのですが、検索するための本もここには持ち合わせていません。それは茎のない小さなヤシの種類で、葉は固くて分れた先は細く尖っています。この植物はフランスでは観賞用として存在しています。琉球の住民たちは、根っこを小さく細く切り、天日で乾燥させます。それを流水で洗い、粉のようにするのです。ケシも栽培されています。ある琉球人によると、これは油を作るためではなく、湿布薬のためにのみ使うのだそうです。

ふだん労働者（男も女も）や市場へ往来する人々でいっぱいの農村は、馬や牛、ヤギもいて賑わっています。馬は小さく、乗用馬や荷物運搬用として使われていますが、農耕や車を引くためには使われていません。というのも、農耕はすべて人の手で行われており、馬車はこの国には存在しないからです。役人たちは粗悪な輿を使うのですが、あまりにも座り心地が悪いので、長い間座っていると住民が*ジーブネー*と呼ぶ船酔い、いやむしろイス酔いをしてしまいます。

小さいサイズの豚や家禽が一般的で、質も良いものです。反対に、狩った鳥獣はまれです。しかしながら、私はフランスのものより小さいウズラや、ヤマウズラ、キジバト、ツグミ、そしてオスの羽が豊かで輝いているムクドリ、などを見たことがあります。また、慶良間諸島の小さな島々に住む200頭ほどのシカ、またはアンテロープに触れないわけにはいきません。4月にこれらの島々の水路測量をしに来たアメリカ人たちが狩りをしに行き、「王のシカた

ち」にこれ以上戦いをしないよう一人の役人が懇願しに行ったときには、彼らはすでに半ダースほども殺していました。

琉球でも私は国際的ともいえる鳥、スズメと出くわし、その人懐っこさやモノトーンの歌声に再会しました。もう一方の不吉な鳴き声は私に何度か我々の美しいフランスを思い出させました。それは、カラスの鳴き声でした。琉球の動物相に属するその他の燕雀のような小鳥や水鳥、渉禽類の鳥について話す必要はないでしょう。なぜなら、鳥類学に役立つように近いうちにこれらをパリに送るつもりだからです。

琉球ではほとんど爬虫類を見かけていません。（三角の頭の）毒蛇がよくいるそうです。アメリカ人によって殺されたその毒蛇の頭を私は見たことがあります。

海岸で調べた貝や貝殻からすると、これらはかなり豊富なようです。これに関しては、出発前に化石を発見したことを言っておかなければなりません。その場所を調べる時間がなかったので、年代については言えません。それにしても私の拾った化石が今は手元にないのが残念です。これらは、腕足貝（の一種）、イタヤガイ、kemnitzia 貝、area イガイと思われるもの、そしてとても大きくてまだ模様を残していた hémo-cedaris[7]などです。私はこれらの化石を、天久、またの名をミッション・フランセーズ［フランス宣教］の北の海岸にある丘の石灰石の中、海抜 30 から 40 メートルの高さから見つけました。そこから首里に行くために泊の北東を通ると、粘土質の丘がいくつかあり、より遠くへ下っていくと鉄分を含んだ砂の丸い小山があります。これらの小山の中で、鉄分を含んだ晶洞石のようなものの中に閉じ込められた木片を採取することができました。

私はこれらの観察録を、不完全で急いで書いたものではありますが、お送りします。これがあなたを楽しませ、科学に役に立つことを願います。もしこれを読んだ誰かが、将来、私の取り組みと不完全さに助言を下さるなら、私は喜んで、そして謹んでこれをお受けいたします。

＜手紙２＞

琉球への遠足

1858 年 6 月 25 日、那覇

…あなたの関心を引くような昔の城塞の跡をご案内いたします。那覇の川が本当の川なら、我々は小舟で散歩でもできるのですが、しかしここから 4 キロも行くと（これは城跡からの距離です）、これは二つの小川に分かれ、大潮のときでなければ水はほんの少ししかありません。それで我々は、このところ賑

わっている那覇港の渡し船で渡り、歩いて行くつもりです。一本マストのこれらの大きな船は鹿児島の日本船で、交易のためにここに来るのは彼らだけであり、琉球が従属している薩摩の王が自分一人でその取引を独占しているのです。これらの船は 15 隻あります。お気づきのように、今の時期は特に砂糖を載せて出航しようとしています。これらの船は、町でいくらかの日本人の姿、特に刀で武装した男性たちを見る機会を我々に与えてくれます。彼らは、刀の代わりに扇子を手に持っている、そうでなければ脇に差している平穏な琉球の人々と際立って対照をなします。これらの日本の紳士方は、これまでの年よりも今年は我々をあまり避けないように見受けられます。

それでは、その他の中国や日本の船は何なのでしょうか？――中国船は、中国からやってきた船で、1 年に大体 1 回荷物を運んできて、我々にお茶や傘、紙などを届けてくれます。日本船は日本へ向かうためのものです。そこへおそらく*貢物*を持っていくのでしょう…。我々の先生の一人を信じるなら、彼が小声で言うことには、王府は自分達のために 3 分の 2 の収入を取るそうです。――より小さな船は漁師のものであったり、（北部にある）運天港から薪を持って来たものだったりします。その他の船は、材木や牛、豚などを載せて琉球に属する島々から来たもので、これらは鍋や食器、様々な家事の道具など足りない品々と交換するのです。

川を渡ると、那覇の郊外と見なせる大きな村に着きます。これらの見物人たちが見えるでしょうか？見物人たちは壁の後ろに隠れています。我々が通り過ぎると、子供たちがウランダ！（オランダ人！）と言うのが聞こえることでしょう。この呼び名は、この国の人々がすべての外国人を区別せずに使うものです。なぜなら彼らは地理に詳しくなく、ヨーロッパ人という概念でさえ持っている者はほとんどいないのです。

目の前に見えるこれらの女性たちは、我々と同じ方向から来ていて、市場に持っていくイモやショウガ、野菜などを運んでいます。じきに、彼女たちが我々を避けるためにこっそり逃げていくのが見えるでしょう。それがいつもの事なのです。我々が礼儀正しい言葉で彼女たちを近くまで引き付けようとしようものなら、おそらく、これまでにないほど素早く逃げて行ってしまうでしょう。

城跡にたどり着く前に、我々は素晴らしい米や、サトウキビ、豆、イモ、さらにはゴザを作るためのイグサでいっぱいの小さな平原を見つけました。

もう少しの辛抱で到着します。この小山を登れば、その頂上にお城の城壁を見ることができます。1 か月前でしたら、道中、白い花冠の百合や満開のミカ

ンの木でさえ見ることができたでしょう。海から、または山のふもとを流れる河原から 40 から 50 メートルのところにたどり着くと、門があります。この門の場所と城跡がまだその大きさを証明しています（約 2 メートルです）。城跡の真ん中に数ピエ[8]のダイオウがいくらか生えています。城の内部は階段状になっています。城壁はまだいたるところに残っていますが、内部はボロボロになっています。これらは石材空積みで作られていました。正確に測ることはできませんでしたが、その長さは 150 メートル、幅は 60 から 80 メートルはありそうです。

高いところは横たわる壁で区切られた 4 つの階のようなものに分かれています。3 つ目の区切りには切り石でできた門がまたあり、その上部はガジュマルの木の根で支えられています。その根がいかにも優雅に側面に沿い、アーチを飾っているので、芸術家ならこれを見たら描かずにはいられないでしょう。この 3 つ目の門には快適そうな建物の佇まいをいまだ確認できるようです。これはおそらく按司のいた場所だったのでしょう。左右には、これに付随する 2 つの小さな囲いがあり、美しいミカンの木のほか、様々な灌木が植えられた小さな林のようなものもあります。この囲いの後ろの小道を行くと、大きなポーチとしっかりと鉄具がつき南京錠で閉められた高い扉のついた非常に高い城壁があります。この扉はポーチのアーチ型天井ほどは高くないので、我々はそれによじ登り反対側へ行くことができました。するとそこは小さな森になっていて、その奥には、人々がまだ時々線香や香をその上でたく「神聖な石」がありました。

この森から戻り、3 つ目の囲いを通り、左の小道を行って壁の割れ目を通りぬければ、最初は見えないのですが 1 番目の囲いとほぼ同じくらい大きな新しい囲いにたどり着きます。この囲いから、山に沿って数百歩行くと、大きな村に出ます。町（グシク）という名称をまだ持っていることからかつての重要さが伺えます。我々はこの囲いの中に 3 人の「ヒャクショウ」（農夫）[9]を見つけました。現地の言葉をよく話せる私の同僚の一人が、この場所の名前を彼らに尋ねました。

- 「ティミ - グスク（豊見城）」（ティミの町の城塞）と言います、と彼らは言いました。

- 昔はここに何があったのですか？

- ああ！昔は偉い方がいたのです。その方は首里（琉球の現在の首都）に住みに行ってしまいました。

- 昔のことですか？

- そうです。かなり前のことです。

するとすぐに、この男たちは見つかるのを恐れる泥棒のように左右を見まわ

し、我々のもとから離れ、それ以上の事は我々に話そうとせずにすぐ近くで仕事をし始めました。我々の先生たちは、このお城について聞かれると百姓たちよりもさらに口数少なでしたので、私はこの件についてそれ以上の歴史的な情報をお伝えすることはできません。ただ、このお城からは、北と西に非常によく海が見えるということを付け加えておきます。

那覇から 2、3 里北のほうには、もうひとつ別の城跡があり、そこからは東と西に海が見えます。「ウラシ（浦添）城」といいます。この城が建てられている丘には、まだ形成中の鍾乳石と石筍がある洞窟があります。

我々の遠足を終える前に、市場へと戻りましょう。「オー、ホエ！オー、ホエ！」この掛け声は何という意味でしょうか？紳士のお方、火がどこかの家を焼き尽くしている、という意味です。藁で覆われ低いこれらの小さな民家では、火事は稀ではありません。誰でも、子供でさえ、それに気付くと「オー、ホエ！」の掛け声で警報を出すのです。すると数分後には、同じ掛け声が那覇の街一帯やさらには郊外にさえ響きます。これに大きな貝の音が加わります。これは貝を吹きながら出す音で、鉄道の保線作業員の警報のような音がします。迅速に広まるこれら音を、日が沈んだ後の夕刻に聞くのは奇妙なものです。これらの掛け声には迷信が含まれていると言われています。各人がこれによって、悪魔が自分の家を焼かないように祈っているのだそうです。琉球では火事はよくあることですが、被害はほとんど甚大になることはありません。家々は一般的に非常に距離をおいて建てられているので、一度に一軒以上の家が炎の餌食になることは稀であり、琉球人達の家財道具に関して言えば、大抵は豊かではありません。

さあ、市のたつ広場に着きました。ここでは必要なものはすべて見つかります。右手には肉と魚の市があります。時々サメも売っています。左手にはミカン、イモ、マッチ、箱、壺、鉄などがあり、ここ、我々のすぐそばには、筆や紙、つまり生徒たちのあらゆる文具があります。少し行くと、布（綿や芭蕉布）、帯、糸の束、それから米、麦、お茶、マミ（えんどう豆やインゲン豆）などが並んでいます。さらに行くと、この国の履物（夏物）や葉タバコまたは小さな箱に入れられた刻みタバコ、また砂糖や様々な種類のお菓子もあります。最後に、我々の田舎の 2 スーの笛を思い出させるおもちゃなどもあります。おもちゃは、安い笛や赤や黄色、緑に塗られた人形、車輪がついてヒレをバタバタと動かす石膏製の魚などです。これらは日本製の子供のおもちゃです。

この市は、天気の悪い日でも毎日開かれます。これは、人々が店ではあまり買い物をしないということを意味します。ここに見えるこれらの小さな作りの良い屋台の女性たちは、大体が商店の使用人です。市には男性は一人もいませ

ん。商いをするのは常に女性たちなのです。那覇の商家では、どんなに裕福なところでも、夫が休んでいるあいだ商売を取り仕切るのは女性だということです。それに対して、久米村と首里の女性たちは、布を織るだけで商いはしません。商いは彼女たちにとっては不名誉な仕事なのです。

商人たちの貨幣のシステムに関して言えることは、我々が現在まで中国のサペックに時々混ざっている、より質の悪いサペックしか見たことがないということです。彼らが銀貨を持っているかはわかりません。王府はアメリカ・ピアストルを 1,440 サペックで我々に両替してくれます。

【注記】

1)原文は、Louis Théodore Furet (1860) *Lettres à M. Léon de Rosny sur l'archipel japonais et la Tartarie orientale*, Maisonneuve, Paris, pp.3-21＜手紙 1＞および pp.31-40＜手紙 2＞で、Patrick Beillevaire 編 *Ryukyu Studies Since 1854: Western Encounter Part 2, Vol. 2*（『西洋の出会った大琉球　第二期：第二巻』）に収録。

2) Patrick Beillevaire 1999。

3)板良敷（牧志）朝忠のことを指しているのは明らかであるが、少なくとも最初の約 2 か月の滞在期間中、フューレがこの人物を日本の役人と認識していたことがわかる。

4)（原注）アレカ椰子：ヤシ科の木

5)（原注）タコノキ：パイナップル科に属するこの種類のうち 3 種のみが極東地域で知られている。これらは Pandanus humilis、Pandanus integrifolius、Pandanus loevis de Loureiro で、特にコーチシナの植物に属する。私の知る限り、日本の植物としてタコノキ科の種類はまだ一つも認知されていない。

6)（原注）学名 Anagallis coerulea：ここで挙げられているのは日本でも目にするルリハコベであろう。ツンベルグは彼の『日本の植物』のなかで Anagallis arvensis の名で言及しており、これはより正確には青い花をつけるルリハコベの一種と考えられる。

7)貝の和名が見つからなかったものはそのままの表記で残した。

8) 1 ピエは 32.4cm。

9)（原注）最下層の人々は「百姓」（平民）と呼ばれている。彼らがいくら金持ちだとしても（実際にかなりの金持ちもいるのだが）、「サムライ」になることは望めない。彼らには「絹の帯」を身に付ける権利さえなく、木綿製で満足しなければならない。履物に関しても同様で、竹の皮製のものを履くことはできず、藁の履物で我慢しなければならない。

【参考文献】

Beillevaire, Patrick (1999) *Un missionnaire aux îles Ryukyu et au Japon à la veille de la restauration de Meiji. Louis Furet (1816-1900)*, coll. «Etudes et documents», Archives des Missions Etrangères de Paris, Paris.